

挨
拶
集

二〇〇六年

オープンキャンパス

高校生の皆様、また保護者の皆様。本日は台風接近の中、三重大学生物資源学部のオープンキャンパスにご参加いただき、ありがとうございます。

三重大学生物資源学部は、いわゆる「バイオ系」の学部としては、全国でも指折りの長い歴史と伝統を持っている学部で、数多くの卒業生が社会で活躍をしています。たとえば昨年度、文化勲章を受賞された沢田敏男先生は、本学部―当時は三重高等農林学校と言っていました―本学部を一九四〇年に卒業されています。

生物資源学部の特徴の一つとして、教育に力を入れているということ挙げることができます。その成果の一つとして、生物資源学部で行われている教育の水準が世界に通用するレベルに達していること(JABEE)が認められています。

本日は、時間が必ずしも充分ではありませんが、学科紹介のブースを設けたり、何でも相談室を設けたり、またいくつかの研究室を開放したりしておりますので、どのような勉強をすることができるのか、ぜひ積極的に見学したり、担当のスタッフに質問をしたりして本学部の教育を実感していただき、入学をご検討いただければありがたいと思う次第です。

八月(七日)

フィールドサイエンスセンター講演会

本日、天野研究科長が所用で不在ですので、代わってご挨拶を申し上げます。

農場、演習林、水産実験所の改組統合によって、フィールドサイエンスセンターが発足してから早くも五年が経ち、本日はその記念行事の一つとして、講演会が開かれることになりました。

発足以来、センターは、学部改組や大学院改組、これに伴うカリキュラム改善と並行して、学生や教員のフィールド教育・フィールド研究に大きな貢献をして参りました。

私共が教育研究の対象とする分野は、伝統的な表現を使えば、農林水産学ですが、最近はその機能に着目して、「生存基盤学」などのような言葉も使われる「北海道大学」ようになってきました。

農林水産業が、どのような時代にあっても人類にとつて最も基礎的な生存基盤の生業であるのと同様に、生物資源学部・生物資源学研究科の教育と研究の基盤をなすのがフィールド教育、フィールド研究であろうと思います。「基盤」というのは、しばしば目立たないことがあります。昨日のシンポジウムや本日の講演会などを通してその役割を新たに認識することができると考えております。

資料によりますと、三重県の面積の 0.1% が、このフィールドサイエンスセンターです。これは、大学法人としての三重大学が国から継承した大きな資産であると思います。今回のような講演会はその資産運用に関する説明責任の一端を担うものと思います。

これまでセンターの活動を支えていただいた多くの方々にお礼を申し上げると共に、この記念行事を一つの節目として、フィールドサイエンスと、このセンターがますます発展することを祈念して挨拶といたします。

す。

十二月（十四日） 附属農場教室

二〇〇八年

「共生環境学専攻と森林総合研究所関西支所との特別連携シンポジウム」

生物資源学研究所の「連携大学院」は、三重大学の近くにある野菜茶業研究所と、志摩市にある養殖研究所と連携し、三重大学では初めての連携大学院として昨年度から発足いたしました。この四月からは、養殖研究所（水産生物生産学講座）に、初めての博士後期課程の大学院生を迎える予定です。

これら二つの連携先は、専攻としては生物圏生命科学専攻に属しますが、今回新たに、共生環境学専攻の連携大学院として、森林総合研究所との連携大学院が構想されております。

高度な設備と人材を擁する企業や法人においては、大学とは異なった哲学に基づく、教育・研究上の方法論があります。このような機関との連携は大学における研究や教育により刺激となり、しばしば閉塞しがちな研究に「活」を入れることにもなります。

異なる海流が交わる潮目が豊かな漁場であるように、異なる哲学と手法を持つ大学と研究所が交わる場所にもまた、豊かな教育の成果と研究の成果がもたらされることが期待できます。

本日は、森林総合研究所との連携シンポジウムですが、このシンポジウムを通じて連携大学院へ向けて一

層の交流が深まることを祈念いたします。

二月二十二日 三重大学（メディアホール）

退職記念パーティ

午前の教授会では、退職される先生方とお別れするのは残念である、と申し上げましたが、これはいささか単純化した物言いであり、また幾分かは学部長としての社交辞令でもあります。

農学部、水産学部を含め、長い間、教育と研究、あるいは事務職に従事してこられました教職員の、膨大な経験や知識をこのまま埋もれさせて、退職されると同時に学部と縁が切れ、次の職場へ行かれたり、極楽隠居を決め込んだり、ということとは、大変もつたいないことでもあり、また許されざることでもあります。

生物資源学部は長い伝統の中で豊富な人材を持っており、学問分野ではなくスタッフ・人材という面から見ますと、生物資源学部と言うよりは、人材資源学部である、と私は思っております。

法人化後は人事のシステムが、よく言えば柔軟になり、授業の場合はボランティア非常勤講師であるとか、特任教授、あるいはフィールドサイエンスセンターの協力教員というようなシステムも整備されてきました。これは大学としては予算をあまり使わずに、退職される方々の経験や学識を、いわば「有効活用」できるという結構なシステムですので、今後、こういう形で声をかけさせていただくこともあろうかと思えます。

退職された先生方に、おちついて授業の準備をしていただいたり、調べ物をしていただけるような、それなりに立派な部屋がまもなく整備される予定です。

このような形で、退職される教職員の方々が学部を引き続き「こき使う」こととなりますが、そのためにも、ぜひ健康にご留意いただきたいと思っております。

退職される教職員の皆様方には、長年のご貢献に改めて感謝を申し上げますと共に、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

以上をもちまして、ご挨拶といたします。

三月（二十一日）

入学式における保護者歓会

本日、生物資源学部に入学されました新入生の皆様方と、ここにお集まりの保護者、関係者の皆様方にお祝いを申し上げます。また、心より歓迎の意を表したいと思っております。

二十一世紀の人類が抱える大きな問題はいくつかありますが、特に重要な問題としては、食料、健康、環境、エネルギーといったものがあります。生物資源学部ではこれらのテーマのすべてに関わって、教育と研究を行っております。

本日の歓迎会では、これから新入生の皆様が四年間、あるいは博士課程まで進まれる場合には9年間にわたって過ごしていただく、生物資源学部の教育環境、研究環境を実際にご覧いただきます。生物資源学部の環境は決して派手なものではありませんけれども、その内容には十分な自信を持っております。

四年後には現在とは全く違った学力やスキルを身につけて卒業されることになると思いますが、そのため

には、新入生の皆様の努力は言うまでもなく、また私共教員のみならず、保護者、関係者の皆様方のご協力が必要となります。

ルイ・アームストロングの歌で有名な、「この素晴らしき世界」What a wonderful world という歌があります。この中で、次のような歌詞があります。

「わたしは赤ん坊が成長してゆくのを見る。

彼らはやがて、わたしよりも遙かに多くのことを学び、知ってゆくだろう。」

これは、少なくとも私が、授業で受講学生の顔を見るたびに思うことです。年長である教員の方がたくさんを知っており、経験があることは言うまでもありませんが、しかしやがて学生諸君は、私を遙かに超えて成長し、活躍するだろう——そういう敬意をもって授業に臨んでおります。これは私一人ではなく、多くの教員も同じであろうと思います。教員も努力いたしますが、保護者・関係者の皆様方におかれましても、ご協力・ご鞭撻を賜りたいと思います。

四月八日 生物資源学部大講義室

大原興太郎先生退職記念パーティ

大原興太郎先生が三十有余年にわたる三重大での職責を全うされ、第二の人生を歩み始められましたことに、後輩の友人といたしまして、心からお祝いを申し上げます。

大原先生の公的なご活躍については、すでにご紹介がありましたので、恐縮ながら個人的なことを申し上げ

げます。私と大原先生の「なれそめ」につきましては、記念論文集に『学科改組とコーおじさんの若さ』というタイトルの短い文章に書きました。私が大原先生と仕事をさせていただいたことの一つは、学部を代表する授業科目である、「生物資源学総論」（これは大原先生が代表をしておられました）という講義の一部をここ数年間、ご一緒に担当した、ということでした。

私自身の専門は物理化学の領域にありまして、私はもともと「総論」という哲学的な領域までカバーするような講義を担当できるような能力があるわけではありません。しかし、大原先生と個人的にいろいろな話をしていくうちに、その気にさせられてしまった、というところがありました。

この件に限らず、大原先生は、人をその気にさせるという種々の才能を持っておられまして、その才能が今日のような盛大な会が開かれる重要な要素ではないか、と思っております。

記念論文の方では、大原先生を「コーおじさん」というニックネームで紹介しましたが、先生は、相手を肯定的に評価して人をその気にさせる能力——「人を落とす」能力というと語弊があるかも知れませんが、そういう能力を持っておられ、私はひそかに、「落としの興太郎」というニックネームを奉っています。私が落とされたのは、総論の授業担当だけではありません。

大学の先生というのは、定年退職後にますます元気になる人と、がっくり元気をなくす人の二種類に分けられるようですが、大原先生が、前者、ますます元気に活躍される方に属する方であることを確信するとともに、そのことを祈念もいたしまして、お祝いの言葉といたします。

オープンキャンパス

皆さんこんにちは。

本日は皆様、暑い中を生物資源学部のオープンキャンパスへ、ようこそおいでいただきました。心から歓迎いたします。

「生物資源学部」という名前は全国でもあまり多くはありませんが、本学部は今から二十年ほど前に、農学部と水産学部が一つとなってできた学部です。しかし単に二つの学部が一つになったというのではなく、新しい社会にふさわしい勉強や研究ができるように、という意味や意気込みを込めてこのような学部の名前がついています。

世界が直面している問題はいくつもありますが、まずは私たちの生活の土台を支える食べ物の問題があります。この中には、食料の生産という問題と、食品の安全という問題がありますし、これらは私たちの健康という問題と関連があります。さらに他の大きな問題としては、環境問題とエネルギー問題があります。

生物資源学部で勉強や研究をしている内容は、なんらかの形で、このような問題に関わっています。

生物資源学部には三つの学科があります。資源循環学科、共生環境学科、生物圏生命科学科です。ときどき、学科の名前がむずかしい、という声を聞くことがあります。それぞれの学科の名前は、どんな事柄を課題にしているのか、どんな問題を解決しようとしているのか、というところからつけられた名前であると考えていただくとよいと思いますが、今日のオープンキャンパスではもっと具体的な中身についてご紹介できるものと思います。

最後に、あらためて皆様に歓迎の意を表しまして、私の挨拶といたします。

八月（五日） 三重大学講堂大ホール

三翠同窓会誌

三翠同窓会会員各位におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

私は三井昭二教授の後を受けて学部長に就任いたしました。短い任期ですが、微力を尽くす所存です。会員の皆様方の格別のご支援を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

学部、大学院の近況をご報告いたします。

この三月には、学部244名、大学院博士前期課程（修士課程）118名、博士後期課程10名が卒業・修了いたしました。また4月には、学部274名、学部3年次編入11名、博士前期課程107名、および博士後期課程19名、計411名の学生・院生を新たに迎えました。昨年度は初めて、少人数ながら「平成生まれ」の新入生を学部に迎えました。今年度からは平成生まれが新入生の大勢を占めることとなりました。間もなく三翠同窓会にも平成生まれのメンバーが入会するはず。時の推移と三翠同窓会の歴史を交々感じさせられます。

生物資源学部は、農学部と水産学部の統合改組により一九七七年（昭和六二年）に発足し、昨年、二十年目を迎えました。学部も「成人」となったわけ。この二十年の間、二〇〇〇年四月には、一学部一学科（生物資源学科）であったものを改組し、資源循環学科、共生環境学科、生物圏生命科学科の3学科を設置

して現在に至っています。また学年進行の形で大学院も改組し、この4月には各新専攻の博士後期課程3年次への進級大学院生を迎え、学部の学科と大学院の専攻に同じ名を冠した教育・研究体制が名実共に完成しました。現在の学部・大学院の構成は図のようになっていきます。

二〇〇六年四月には大学院の部局化が行われ、すべての教員が大学院所属となったことは、本紙8号で天野秀臣先生が報告されておりますが、翌年4月には、独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構野菜茶業研究所、および独立行政法人水産総合研究センター養殖研究所と連携し、連携大学院が発足しました。この4月には初めての大学院生をこの連携大学院の研究室に迎えています。

他方、これまで多くの学生を育ててきた練習船「勢水丸」も、建造後三十年近くが経って老朽化が進んでいましたが、念願の新船建造が認められ、今年3月には新・勢水丸の起工式が行われました。今年8月の進水式、来年一月の完成を目指して作業が進んでいます。新船は海洋ブロードバンドなど最新の設備を誇っています。(詳細は学部ウェブページをぜひご覧ください。三重大学のウェブページでは、新・勢水丸の船体に表記される「勢水丸」の筆文字を学長が書かれた様子が、「学長ブログ」に掲載されています。)

三翠同窓会はずでに長い歴史を持っていますが、現在、三重大学全体としての同窓会設立の準備が進んでいます。(これまで全学同窓会組織を持つ大学はほとんどなく、三重大学もその例外ではありませんでした。)最近、「フィランソपी」という言葉を聞くことがあります。全学同窓会設立の動きは、三重大学全体として、卒業生・修了者にフィランソピーを期待するという面もあろうかと思えます。その範となるのは三翠同窓会であることは間違いないところです。会員各位におかれましては、生物資源学部・生物資源学研究所

のみならず、三重大学にも特段のご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

文書による挨拶 九月

三翠同窓会総会

本年度の三翠・同窓会・総会が盛大に開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。私は、三井・前学部長の後を受け、今年二月から学部長に就任いたしました。よろしくお願いいたします。

私はこの部屋（大講義室）で週に一度、私の息子よりも若い学生たちを相手に講義をしておりますが、先ほどの部屋に入りましたときには、大先輩と称すべき皆様方の顔が並んでおり、時ならぬ緊張を覚えますとともに、三翠同窓会の歴史の重みを肌で実感いたしました。

さて生物資源学部の近況につきましては、この七月に発行されました『同窓会報』にその概要を記しましたが、いくつかの点をここでご報告いたしますと、まず農学部と水産学部が統合して生物資源学部ができてから丸二十年が経ち、新学部も「成人」となりました。約十年前に学科改組を行い、一学部三学科となりましたが、その学年進行が大学院まで進み、今年度、博士後期課程の三年生を迎え、学科、大学院改組が完成しました。

練習船「勢水丸」の老朽化が進み、新しい勢水丸の建造が進んでおりましたが、その建造も順調に進み、来週、下関の造船所で命名・進水式が行われます。来年3月には本学で完成式が行われる予定です。

他方、三重大学「農業別科」も、これまでに多くの修了生を輩出してきましたが、様々な状況に鑑み、今

年度末をもって廃止することを予定しています。正式には文科省の認可を待つこととなりますが、廃止後は、農学、林学、水産学に関するいくつかの講義や実験・実習を半年、あるいは一年間で履修する、「特別コース」を設ける準備をしております。

世界の経済は激動の嵐に見舞われておりますが、その中であって、農林水産業の重要性があらためて見直されています。このことは、嵐が吹くことで表面の虚飾が吹き飛び、社会や人間が生きるための「土台」が見えてきた、ということではないか、と私は考えています。その意味で、農林水産学を担う生物資源学部の役割もまた一層重要になってくると自覚しております。このようなときにあたり、三翠同窓会の皆様の、学部への一層のご支援をお願いいたします。

最後に、三翠同窓会の一層の発展と皆様のご健勝を祈念いたしまして、私の挨拶といたします。

九月二十日

練習船「勢水丸」進水式祝賀会

この度は、私共の練習船、「勢水丸」を大変立派に作っていただき、感謝を申し上げますとともに、私自身も感激をしております。

先日来、新「勢水丸」のモックアップが私共の学部の玄関に飾ってありまして、だいたいこのようなものだ、と想像はしておりました。勢水丸は、大学の練習船としては、必ずしも大きいものではありませんけれども、本日、実物を拝見して、模型とはまったく異なる迫力に圧倒される思いがいたしました。

大学や学校では、卒業式を、人生の船出であるとか、特に進水式になぞらえることがよくあります。本日、実際の進水式に立ち会いましたが、私共が、入学した学生を四年間かけて育て上げ、社会へ送り出すように、この造船所で勢水丸がだんだんと組み立てられていき、この進水式を迎えたということとは大変よく符合するものだ、ということに思いを致しました。今後、卒業式などで何かの挨拶が求められる場合には、今日のこの経験がたいへんよい話の材料になるとひそかに喜んだ次第です。

本日まで、勢水丸を育て上げていただきましたことに感謝を申し上げますとともに、あと少し、完成まで面倒を見ていただくようお願いを申し上げます、私の挨拶といたします。

九月二十四日 三菱重工業株式会社下関造船所

園芸学会

園芸学会秋季大会がこのように盛大に開催されますことに、心からお祝いを申し上げます。会場大学として歓迎を申し上げます。

今回の会場となっております三重大学生物資源学部は、その起源は三重高等農林学校です。高等農林は一九二一年の創立であり、やがて創立九〇年を迎えますが、園芸学会のホームページを拝見しますと、園芸学会は一九二三年の創立とのことで、ほぼ同じ九〇年近い歴史を持っているということを知りました。私自身は、農芸化学会や生化学会などに属しており、どちらも一万人以上の会員を持つマンモス学会ですが、いずれも、園芸学会よりも後発の学会です。

この間、遺伝子と情報ネットワークの革命がありました。講演要旨集などを拝見しまして、どちらの革命もこの学会が自然に吸収して、変わりない営みを営々と続けられていることを感じました。

近年、園芸学をはじめとした農学の重要性が再認識されつつありますが、園芸学会が今後ますます発展され、日本と世界に貢献されることと、学会員の皆様の研究の発展とご健勝を祈念いたしました。挨拶といたします。

三重大学講堂 九月二八日

「研究支援室による講演会」

今年度、生物資源学研究科に、「研究支援室」という組織を設けました。これは文字通り、研究科で行われる様々な研究活動を支援する組織で、元学部長の天野先生に相談役として加わっていただいています。支援室の最初の大きな催しとして、會田勝美先生による、科研費に関する講演会を企画いたしました。

すでにメール等で案内をしておりますが、會田先生は東京大学の農学部長や水産学会会長を務められ、現在は、東京農業大学総合研究所にお勤めです。そしてもう一つ、「日本学術振興会 学術システム研究センター」の「農学主任研究員」という、大変重要な役職をつとめていらっしゃいます。

本日は、日本の学術研究のあり方を研究されているというお立場から、科研費に関連して、いかにして採択される申請書を書くか、という個人的・技術的な問題と、科研費の大きな枠組みという、双方の視点から、科研費についてのお話をしていただくことになっています。

ちなみに、生物資源学部には、會田先生のご指導を受けた教員も何人かおりました、そのご縁もあって、本日の講演会となりました。また三重大学の元医学部長の鎮西先生と會田先生は、学生時代からのご友人と伺っております。

會田先生には、ご多忙のところ、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

十月（六日） 生物資源学部大会議室

「環境生命科学を学ぶ女子学生のためのワーク&ライフバリュープランニングプログラム」講演会

このセミナーは、宮崎多恵子准教授が、三重大学教育GPの一つとして企画しました。「環境生命科学を学ぶ女子学生のためのワーク&ライフバリュープランニングプログラム」をコアとして企画されたもので、第一回目のセミナーが百五経済研究所のご協力を得て開催されることになりました。

ここに集まられた方々は、すでにこのセミナーの趣旨をよくご存じのことと思えますし、環境問題と同じで、何が問題か、ということとは十分に認識されていると思います。

そういった次第で、特段に何かを申し上げるようなことはありませんが、生物資源学部のホームページに掲載されている案内を見て重要であると思われましたのは、このセミナーに「男女を問わず参加してください」と書いてあったことです。

つまり、これも言うまでもないかも知れませんが、問題は女性に限ることではなく、男性のワーク&ライフバリュープランニングにとっても重要な問題である、ということなのです。

女性が様々な社会的なハードルを越えなければならぬのと鏡像の関係で、男性、男子学生にもまだ、社会や家庭における、必ずしも根拠のない固定的役割があります。一方だけの解決や解放ということはおそれなく、男性も女性も自律した社会人となることが、生きやすい社会を作るために重要なことであろうと思っております。その意味で、このようなセミナーが開かれて、男女を問わず参加されることは大変重要な意味を持っていると思います。

このセミナーが今後、一層充実していくことを祈念しまして、挨拶いたします。

十月(二十二日) 生物資源学部

大紀町と三重大学生物資源学部との相互友好協力協定調印式

この度、大紀町との相互友好協力協定に調印の運びとなり、三重大学生物資源学部といたしましても、大変喜ばしく、また誇りに感じております。

三重大学は、「地域に根ざし、世界に誇れる独自性豊かな教育・研究成果を生み出す」ことを「大学の基本的な目標」として掲げておりますが、今回の協定は、「地域に根ざす」という目標にそのまま当てはまるものです。

大紀町は「海と山の幸に恵まれたまち」であると承知しておりますが、三重大学生物資源学部もまた、「山の頂から海の底まで」を一つの学部で研究対象とすることを特徴としており、その意味でも、大紀町と本学部の協力協定は自然なものであると思えます。

大学の使命はもとより教育と研究ですが、生物資源学部は農林水産系の学部、すなわち実学を旨とする学部ですので、基礎的な研究の他に、現場のニーズ、現場の問題点をよく知るといったことが重要な業務の一つです。今回の協力協定では、「地場産業の振興」をはじめとして、いくつかの点で連携と協力を行うことになっておりますが、「地域防災に関すること」が挙げられていることが特徴的な点であると考えております。この点に関しましては、すでに大紀町と本学部教員による協力の実績もあり、今後、一層、発展していくものと期待しております。

三重大学の使命として、地域に根ざすことを掲げていると申しましたが、大紀町の文書を拝見いたしますと、大紀町の農林水産業に関連して、大学との共同研究を計るなどの提言も盛り込まれており、その意味で協力関係を結ぶ機が熟したものと思えます。

今後、大紀町と三重大学生物資源学部の協力関係が充実し、ともに発展していくことを祈念いたしまして、ご挨拶いたします。

十一月二十八日 三重大学三翠会館

二〇〇九年

学部親和会新年会

新年おめでとうございます。

もう正月気分も抜けてしまいましたが、松の内のぎりぎりに総会と新年宴会を開催することとしました。三重大学のさる要人によりますと、生物資源学部は教員と職員の関係がよい部局の一つだとのこと。今年、ダーウインの生誕二百年ですが、ダーウインによると、人類や動物では、協力すること、臨機応変に対応する者が生き残る・繁栄していくのだそうです。

本日は生物資源学部の親和会ですので、教職員が一層親しく和むことによって、生き残り、繁栄していきたいと思えます。簡単なながら、開会の挨拶といたします。

三翠農学会三重県支部機関誌

三翠農学会三重県支部の皆様におかれましては、ご清祥のこととお喜び申し上げます。皆様には平素より、生物資源学部・生物資源学研究科の活動にご支援をいただき、感謝申し上げます。

近況をご紹介します。

生物資源学部は今から九年前に、それまでの「一学部一学科」から「一学部三学科」への改組を行いました。この改組は大学院にも及んで順調に学年が進行し、この三月には改組後最初の課程博士が誕生します。

生物資源学部の兄弟組織ともいえるべき農業別科は、創設以来長い歴史を持ち、社会で活躍する多くの修了生を送り出してきましたが、近年は進学希望者も激減して学生が不在の年もありました。研究科内での議論や関係各組織とのご相談を経て、別科は本年度をもって廃止することを決定しました。これを受け、農業等に関するいくつかの専門的な講義や実習を系統的に受講したいと希望される若干名の方を対象として、「生物資

源学部特別支援プログラム」が新たに四月から発足します。

練習船「勢水丸」の建造が進んでいることはすでにご承知のことと思いますが、昨年三月の起工式に始まり、進水式、海上運転、艀装、引渡式を経て、この三月には完成を祝う予定です。

近年、食品の安全にかかわる問題が頻発し、これを契機の一つとして、日本の食の海外依存度の高さや、日本の食糧自給率の異常な低さが実感をもって社会で語られ始めました。また昨年後半の世界的な経済状況の悪化には、実体を伴わない経済の問題点が集中的に現れています。

「実体」そのものである農林水産業をないがしろにして健全な社会はあり得ません。農林水産学を学び・研究する生物資源学研究科が社会において果たすべき役割が一層重要になってきているものと考えています。皆様の一層のご支援をお願い申し上げます、ご挨拶いたします。

文書による挨拶 一月

「勢水丸」竣工祝賀会

本日は、生物資源学研究科附属練習船、「勢水丸」の竣工祝賀会に多数の来賓のご臨席を仰ぎ、盛大な会を催すことができましたことを、研究科を代表いたしましてお礼を申し上げます。

また、建造に関して、これまでに様々なご支援、ご指導、ご協力をいただきました多くの皆様方に感謝を申し上げます。

新しい勢水丸は、平成十八年（二〇〇六年）に建造が認められ、翌年から三菱重工・下関造船所で建造が

進みました。建造過程の詳細につきましては、後ほど、スライドでご紹介をいたしますが、昨年三月に起工式が行われ、九月に進水式、十二月には走行試験が行われ、この一月に母港である松阪港に入港し、何度かの習熟航海を経て今日に至っております。

先ほどの文部科学省のご祝辞にもございましたように、現在、世界がかかえる様々な問題について、海洋や、これを研究する海洋科学、水産科学が果たす役割は大変大きいものがあります。

本日は、勢水丸の竣工を祝う会ではございますが、勢水丸の完成を喜ぶだけでなく、それとともに、三重大学や三重大学生物資源学研究所に課された社会的な責任や期待の大きさを実感し、身が引き締まる思いがいたします。

何年前のことですが、バツハの研究者「杉山好・東大教授」が三重大学を訪問され、一般教育で講演会をされたことがあります。その方は、Bachが「小川」であることを踏まえて、三重大学は、小川ではなく大きな海（大海）に臨む大学、真理の大海に臨む大学である、と三重大学の印象を語られたことがあります。

海は、生物資源や鉱物資源の宝庫であるだけでなく、生命科学や地球科学の真理の宝庫でもあります。

生物資源学研究所としては、社会から寄せられる期待と責任を自覚しつつ、この真理の大海原に、最新鋭の練習船、勢水丸をもって乗り出していききたいと考えております。

ご来賓の皆様をはじめ、勢水丸建造にかかわっていただきました多くの方々に改めてお礼を申し上げ、簡単でございますが、挨拶といたします。

三月七日

松阪フレックスホテル

鈴木高専、鳥羽商船との交流プログラム開会式

ようこそおいでいただきました。心から歓迎いたします。

今日は、「女性研究者支援モデル育成事業」に関連した企画で、「女性研究者」がキーワードですが、このような問題を考えるときに、しばしば思い出すことがあります。

それは、私が高校生の時の国語の先生のことです。この先生は、戦争が終わった時期に東大の文学部を出られた方ですが、当時、東大は戦後初めて、女子学生を受け入れました。その当時のことをこの国語の先生が回顧して言われるには、その初めての東大の女子学生の中には、詰め襟の学生服を着て、自分を「ぼく」と言っている人がいた、ということでした。しかし、今では（今ではというのは、私が高校生の頃のことです）女子学生で学生服を着ていたり、自らを「ぼく」といったりする学生はいない、女性は自然に女性として学生である、ということを言われました。

現在では、東大の女子学生と言ってもあたりまえの話ですし、生物資源学部の学生の三人に一人が女子学生であると言っても誰も驚きません。戦後から六十年以上たって、それだけ社会が成熟しつつあるのだと思います。

今年、生物資源学部の大学院でメタボリックシンドロームの研究をしていた女子大学院生の一人が、全日空のパイロット試験に合格して、四月からトレーニングに入るそうです。せっかくの研究がもったいない、ということはありませんが、それは別にしますと、全日空の女性パイロットと言えば、現在ではまだ珍しいことです。しかし、あと何年かすればあたりまえになって、「昔は女性パイロットと言うだけで話題になった」

という昔話になるかもしれません。

理系の女子学生は当たり前になりましたが、理系の女性研究者は諸外国に比べてもまだ少数で、パイロットほどのことはないかもしれませんが、必ずしもあたりまえのことにはなっていないですね。

今回は、女性研究者支援というプロジェクトの一環としての交流会ですが、やがて近い将来に「女性研究者支援」という必要がなくなれば、あるいは、あえて「女性」ということを言う必要がなくなれば、日本の社会が成熟したことを示すことになるのだらうと思います。その日のために、今回のプログラムが前進の一步の役割を果たすことを願っています。

今日一日、このプログラムを十分に楽しんでいただくことを願いまして、挨拶いたします。

三月十日 生物資源学部大会議室

「JAグループ三重」との連携協定調印式

このたびは、田中利宣・三重県農業協同組合中央会会長はじめ、「JAグループ三重」幹部の皆様のご出席を仰ぎ、連携協定の調印に臨むことができずすことを、大変喜ばしく思っております。

JAグループ三重と三重大学生物資源学研究所とは、三年前に連携協定を結び、共同研究や人材交流を通じて連携強化を図って参りました。これまで、主に若手教員の研究にご支援をいただいたり、また社会連携の推進にご支援をいただいております。

このたび、その第一期の連携協定の期間を終え、新たに三年間の協定を締結する運びとなったわけですが、

単に協定の継続・延長というにとどまらず、新しい内容を盛り込んでいきます。一つは、JAGグループと生物資源学研究科共催による、市民向けの公開講座の開催です。これは、主に三重県内の市民の皆様に対し、大学での研究成果の一部を還元する機会であるとともに、私共が社会のニーズを学ぶ機会となることも期待しています。

また、これまでJAからは大学の教員に対して研究支援をしていただきましたが、今回はそれだけでなく、大学院生の研究や、学部学生の提案に基づく調査・研究に対して、ご支援を賜る予定です。市民の皆様は、納税を通じて大学を最も基本的なところで支えていただいているスポンサーであり、また学生・大学院生は、社会からお預かりしているカスタマーです。これまでの協定や活動の内容と、今回の協定の違いをあえて一言で申しますと、今回は、社会との係わりをより意識したものとなっていること、そして両者が連携して一層の社会貢献を目指すものとなっている、と言えるものと思います。

今回新たに締結する協定が、その意味で豊かな実りをもたらすことを期待し、またそのための努力を重ねることを表明いたしました。挨拶といたします。

三月十二日 三重大学三翠会館

退職者送別会

齊藤昌宏先生（森林保全生態学）と脇田正彰先生（動物生産学）の送別を開くことになりました。お二人の先生方には大変お世話になりましたことに、改めてお礼を申し上げます。

先週の教授会の最後にご挨拶がありました。お二人の先生はご経歴において対照的です。私は、学問分野がその研究者個人の性格・人柄を強く規定する、と思うことがあります。たとえば同じ理科系であっても、工学系の研究者は様々な問題を「プロセス」として捉えますし、理学系の研究者は「原理」として捉えます。斎藤先生と脇田先生とは、それぞれ森林と動物を研究対象としてこられたわけですが、植物と動物という、その対照的な特徴が二人の先生の性格に反映しており、斎藤先生は話し方も歩き方も大変静かですし、脇田先生は動的で、お話をしても気迫に押されるという印象を持っています。

先生方の個性が研究の個性を強く反映しているというそのことが、長い間に渡って先生方が個性的な研究と教育に人生をかけてこられたことの証拠であろうと思います。

特に最近は六十三歳の定年退職は単なる人生の区切りに過ぎません。今後、お二人の先生は大学の雑用から開放されて、一層、ご研究が充実するものと思っています。

先生方におかれては今後、健康に留意され、ご研究がますます発展することを祈念するとともに、今後もう少し離れたところからご指導を賜ることをお願いいたしました。挨拶いたします。

三月二十三日

入学式における保護者歓迎会

新入生の皆様のご入学をお祝い申し上げますと共に、保護者の皆様を心から歓迎申し上げます。

この保護者歓迎会は、生物資源学部が3年前から始めたもので、保護者の皆様から、予想外と言うべき好

評をいただいております。

私事で恐縮ですが、私にも3人の息子がおります。二人はすでに卒業しましたが、学生時代、大学や下宿を見せてほしいと思っていました。必ずしも歓迎はしてくれなかったように記憶しています。こういう機会をその大学が設けてくれていれば、大きな顔をして見に行くことができたのではないかと、とも思っております。

さて、生物資源学部の教育内容や、具体的な研究室の様子はこれからご案内いたしますが、ごく簡単に最近のニュースも含めてご紹介をしたいと思います。

〔中略〕

以上のように、学部として教育に力を入れておりますが、今後とも努力をして一層充実させたいと思っております。

保護者の皆様におかれましても学部にご支援を賜りたく、よろしくお願いいたします。

四月八日 生物資源学部大講義室

第8回海環境と生物および沿岸域環境修復技術に関するシンポジウム

本シンポジウムの開催に当たりまして、会場大学といたしまして歓迎を申し上げます。

三重大学生物資源部は、農学部と水産学部を母体として二十年ほど前に創立されました。創立以来、「山の頂から海の底まで」を、一つの学部で教育・研究対象とすることを旨として参りました。多くの教員が「海」

を研究対象としており、また環境とその維持、あるいは環境修復を課題としております。その意味で今回、このシンポジウムが三重大学で開催されますことは、きわめて自然なことであり、また私どもとしても名譽に感ずる次第です。

日本を代表する思想家に内村鑑三という人物がおります。内村は、現在で言いますと北海道大学や東京海洋大学の関係者というべきかと思いますが、内村はその若き日に水産学の研究者として出発し、アワビや鮭に関する先駆的研究をしておりますが、それにとどまらず、現在で言えば、ちょうどこのシンポジウムのテーマと重なる、水産資源の保護、海洋環境の保全など、きわめて現代的な問題を論じております。

私は学生時代にそのことを知って、意外の感に打たれるとともに強い印象を受けた記憶がありますが、このことは、内村が多才であったということもあろうかとは思いますが、海洋環境保全などの問題は、個別技術的要素のみならず、強靱な思想や哲学を背景にするべき、困難でチャレンジングな課題であることを示唆しているのではないかと、思われます。その意味でこのシンポジウムが社会から期待される場所は小さからぬものがあると思います。

今回のシンポジウムが豊かな実りをもたらし、社会をよりよくすることに貢献することを祈念いたしまして歓迎のご挨拶いたします。

七月七日

日本農業市場学会懇親会

日本農業市場学会二〇〇九年度大会の開催をお祝い申し上げますと共に、会場大学として歓迎を申し上げます。

実は、私は日本農業市場学会という学会について、よく存じ上げておりませんでした。今回の学会の世話人である長谷川教授に、この学会がどんな学会かについて話を聞きました際、つい口がすべって、「メジャーな学会ですか」と尋ねましたところ、言下に「メジャーな学会です」という答えがあり、この学会ではどうい研究がされているか、ということをも、懇切丁寧に解説をしてもらいました。更に、インターネット等でもいろいろ調べまして、この学会についてはよく腹に入ったつもりです。そこには「人の営み」ということが強く意識されているように感じました。

それで感じたことですが、三重大学生物資源学部は、「山の頂から海の底まで」を一つの学部で教育・研究することを旨としており、それをキャッチフレーズにもしている訳ですが、農業市場学会の会場校となる学部のキャッチフレーズとしては、「人の営み」が充分に表現されていない憾みがある、ということに気づいた次第です。これも会場校としての思わぬ役得であったかもしれません。

さて私は四半世紀以上前に三重大学に赴任しましたが、そのときに感じたことは、三重県は食べ物が安くておいしい、ということでした。その感想は今でも変わっておりませんし、またそのことは、農業市場学会の先生方にとっては一つのテーマになるのかも知れないなどと素人なりに思いますが、いずれにしましても、三重県にはおいしいものが多くありますので、学術研究と共に、三重での二日間のご滞在をお楽しみいただ

ければ会場校としては大変嬉しく思います。

学会の成功を祈念いたしましたして、歓迎の言葉といたします。

七月十一日 三重大学生協

中国との「先端農業科学シンポジウム」

閉会に当たりまして、一言ご挨拶を申し述べます。

昨日から今日までの二日間にわたりまして、農学の最先端研究に従事する研究者を中国からお迎えし、農業に関連する先端的な研究事例の報告と意見交換が行われました。その内容は、情報科学から遺伝子技術、エネルギー、地球温暖化、さらには、農業経済にまで広範な領域にわたるものでした。農学はすでに古い伝統を持つ学問領域ではありますが、現代の農学は、伝統的な「農学」を含みつつ、しかしその姿を大きく変えて、きわめて学際的で新しい学問になりつつあることを改めて認識いたしました。今回は、その学際的なシンポジウムが国際的な参加者を得て開かれたわけであり、意義深く、刺激に富んだ企画であったと思います。

日本の代表的な新聞の一つに「日本経済新聞」がありますが、昨日の一面記事では、日本の大企業が本格的に農業へ参入することを伝えておりました。日本においては食料の自給率や、食品の安全性などの問題が、近年、重要かつ深刻な問題として一般に認識されつつありますが、それだけではなく、かつては日本では斜陽産業と言われた農業が、大企業によっても改めて注目されつつあることを示すものであり、歴史のテーブ

ルが一回転した、という感想を持ちました。その意味でも、今回のシンポジウムは時宜を得たものであったと思います。

今回、三重大学を訪問され、この有益な学術交流の機会を与えていただきました Lu Wenru 教授始め、中国農業科学院の皆様にお礼を申し上げます。

最後に、中国農業科学院の、皆様の日本でのご滞在が安全で快適であり、実り豊かなものであることを祈念しますとともに、このシンポジウムを機会として私共の友好と、両国の農業科学が一層発展することを祈念しまして、閉会のご挨拶といたします。

七月十九日 生物資源学部大講義室

東海・近畿地域大学附属農場協議会

第50回東海・近畿地域大学附属農場協議会の開催に当たりまして、当番校として心より歓迎を申し上げます。

ただいまご挨拶を申し上げた内田学長は医師・医学者ですが、今のお話でおわかりのように、学長は農業・農学に対しても造詣と強い関心があります。

私は一年生向けの入門講義で、五千円札の肖像にもなった新渡戸稲造の『農業本論』を紹介していますが、その農業本論の中で新渡戸は、農学と医学は二つの点で似ている、ということを行っています。

ひとつは、どちらも人の命に体に直接かかわる学問であること、もう一つは、したがってどちらも、非常

に間口が広い、いろいろなことに関わる学問である、とうことです。

もしこれに、もう一つ共通点を加えるとしますと、どちらもフィールドが欠かせない。医学部にフィールドとしての附属病院があるように、農学系学部にはフィールドとしての附属農場がある。そしてそれらを介して社会につながっている・つながっていかねばならない、というような構造であると思います。

その意味で、今回、医学者である学長とともに、皆様に歓迎の挨拶ができますことを嬉しく思います。この会合が実り豊かなものであることを祈念いたしまして、歓迎のご挨拶いたします。

七月三十日 生物資源学部大会議室

三重県・伊勢湾岸地域の自然災害と防災・減災シンポジウム

ただ今プロジェクトの準備をしてきている大学院生が、あふれ出るような「やる気」を持っておりますために、プロジェクトの映像までスクリーンからあふれ出てしまっていますが、スクリーンの方は、静まるまで今しばらくお待ちください。

さて本日は、本シンポジウムにご参加いただきましてありがとうございます。主催者として心からお礼を申し上げます。

本シンポジウムの趣旨につきましては、さきほど葛葉教授から説明を申し上げましたので、屋上屋を重ねる必要はないと思いますが、防災・減災の問題は、三重大学としても、また生物資源学研究科としても、近年、大変重要視している課題です。

今年は伊勢湾台風から五十年目の年で、新聞でも連載記事が掲載されています。個人的な事柄で恐縮ですが、五十年前、私は小学校へ上がる前の年でしたが、伊勢湾台風の直撃を受けたところに住んでおり、そのときの恐怖をいまだに覚えておりますし、「救援物資」というような、今の幼稚園児がとでも覚えそうにない言葉を、意味もわからずに覚えまして。

昨年末、加藤周一という著名な評論家が亡くなりました。加藤は様々な視点から日本人のメンタリティーを検討しています。その中で、日本人の特徴的なメンタリティーの一つとして、「明日は明日の風が吹く」という考え方、「場当たり主義」、ということを行っています。それが悪く出た場合、危険や危機が予測されても準備や予防計画をたてず、いざ事が起こって初めて、しかしそれなりに素早い対応をする、というような行動様式を指摘しています。

伊勢湾台風の場合も、当時としてはかなり正確に進路予測ができていながら十分な対応ができず甚大な被害が発生してしまい、その後で防災対策の法律ができたようです。

本日のシンポジウムは、その典型的な日本的メンタリティーとは「逆行」する趣旨ですので、そういう視点で講演をお聞きいただければ、新たな、別の興味を発見していただけるのではないかとひそかに考えております。

今回のシンポジウムが、参加いただいた皆様はじめ地域の皆様にとっても有意義なものであることを祈念いたしました。ご挨拶いたします。

七月三十一日 三重大学メディアホール

JAGグループ三重 食・農・いのちの市民講座「食を考える」

JAGグループ三重との共催で、「食・農・いのちの市民講座」を開催できますことを大変嬉しく思いますと共に、雨の中をこの講座にご参加いただきました皆様にお礼を申し上げます。

JAGグループ三重と三重大学とは、共同研究などを通じてすでに連携の実績があります。その実績を踏まえ、今年度からは、より直接に地元の市民の皆様との交流の中で、大学での研究や教育の成果をご紹介します、という企画を始めました。本日はその第一回目の会合です。

大学はその性質上、ありとあらゆることを研究対象としており、中には、大学という組織そのものを研究対象としている研究者もいますが、本日の講演は、大学における最も「地に足の着いた」内容の一つです。

昨今の経済危機について色々いわれています。いくら巨額でも電子マネーを食べて生きていくことはできず、生きるためには安全な食べ物育てて食べることにしかないという、地に足の着いた文化があらためて定着しなければならぬという教訓を読み取るべきであろうと思います。

このような講座が少しなりともそのようなことに貢献できればと思っております。

土曜日の午後、この講座をお楽しみいただければ大変嬉しく存じます。

八月一日 三重県教育文化会館

オープンキャンパス

梅雨明けの暑い日となりましたが、生物資源学部のオープンキャンパスへようこそおいいただきました。

「生物資源学部」という名前は、全国でもあまり多くはありませんが、農学系、海洋系の学部です。生物資源学部は、九十年近い歴史があり、京都大学農学部や名古屋大学農学部よりも古い歴史を持っています。ただ伝統があるだけではなく、新しい社会にふさわしい勉強や研究ができるように、という意味や意気込みを込めて、「生物資源学部」という名前がついています。

〔中略〕

このあと本日のオープンキャンパスの全体説明の後、生物資源学部校舎で研究室見学などをしていただきますが、現在、トイレを新しくするための工事が始まっており、若干のご迷惑をおかけします。この点につきましてお詫びをいたします。

最後に、あらためて皆様に歓迎の気持ちを表しまして、挨拶といたします。

八月（四日）

三翠農学会三重県支部総会

三翠農学会三重県支部総会の開会をお祝い申し上げます。また皆様におかれましては、日頃より、学部の運営に対してひとかたならぬご支援を賜り、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

国立大学が法人化されて今年で六年目となりました。この間、予算が徐々に削減され、これは主に人件費の削減、つまり教職員の定員減という形で影響を受けました。

国立大学、特に、地方の国立大学はこのような困難の中にあり、三重大学もその例外ではありませんが、

しかし生物資源学部はお陰様をもちまして、研究や教育の質を落とすことなく活動を続けております。昨年度、全国の国立大学は一斉に評価を受けましたが、三重大学は教育と研究で他大学よりよい評価を受けており、また三重大学においても生物資源学部は「研究」の領域で優れた評価を受けました。

昨年はまた、経済が大きな打撃を受けましたが、今年3月の卒業生は概ね無事に卒業し、就職をしております。また今年度の卒業生の就職は特に厳しい状況にありますが、そのような中でも健闘しており、昨年並みに近い割合で就職の内定をいただいております。

今後、学部の活動を一層活発なものとしていく所存です。引き続き、皆様からのご支援をいただきますようお願い申し上げますと共に、三翠農学会のますますの発展を祈念いたしましてご挨拶と致します。

十月三日 生物資源学部教室

昆虫学会

日本昆虫学会の大会が開催されますことにお祝いを申し上げます。また会場大学の一員として、歓迎を申し上げます。

今回の大会の事務局である三重大学生物資源学部は、その起源は三重高等農林学校です。一九二一年の創立で、創立九十年を近く迎えますが、昆虫学会のホームページを拝見しますと、学会は一九一七年の創立でということ、長い歴史と伝統のある学会であるということを知りました。

この間、生物学の世界では遺伝子工学の革命がありました。

この懇親会で挨拶するように求められ、私は門外漢ですので今回の学会のプログラムを拝見しまして、昆虫学会が基礎研究から応用まできわめて広い分野をカバーしていることに強い印象を受けましたが、もう一つ強く印象に残ったことは、少なくともプログラムの中には、「遺伝子」という言葉が一度も出てこない、ということでした。

生物学関係の学会ですから、遺伝子に関する話が少しはあるかと漠然と想像していた訳ですが、そうではなく、流行廃りによらず、昆虫学会がどっしりと腰をすえて変わりにない前進を営々と続けられていることを感じました。

昆虫学会が、一層腰をすえ、今後ますます発展され、日本と世界に貢献されることと、学会員の皆様の研究の発展とご健勝を祈念いたしまして、挨拶いたします。

十月十日

三翠志登茂会（農業土木同窓会）

〔略〕

十月十四日 プラザ洞津

中西先生葬儀における弔辞

謹んで中西先生にお別れのご挨拶を申し上げます。

先生がすでに短からぬ期間、病との戦いの中におられたことは承知しておりましたが、しかしつい先日、温顔をお見かけしたことを思いますと、一昨日の訃報はあまりに突然であり、深い悲しみと共に驚きを禁じ得ません。

先生はその顔容からも察せられるように温厚な方であり、また学部内での、報われることの少ない、目立たない、しかし誰かがしなければならぬ細々とした仕事を、愚痴ることなく、気負うこともなく、淡々と引き受けてくださいました。

理学部物理学科の出身というご経歴は学部の中ではユニークであり、生物資源学部の教員としては人知れぬご苦勞もあつたかも知れません。しかし通常の専門家とは異なる、物理のご出身ならではの独特の視点がユニークな研究へと発展しており、それが豊かな実を結ぶことが期待されていきました。

私自身は、先生と個人的にお話する機会は多くはありませんでしたが、3〜4年前のある日、帰宅する際に、大学から江戸橋駅まで歩いてご一緒したことがありました。道すがら、「オーペンキャンパス」が話題となり、高校生や保護者が研究室訪問をされるときの訪問のしやすさ、ということに話が及び、訪問者の数と重力ポテンシャルの関係、これにおよぼすエレベータの効果という話題で、思いがけず楽しいお喋りが弾んだことが昨日のことに思い出されます。

先生は、物理学や微生物学関係の論文の他に「環境倫理とエントロピー」「科学者としての責任」「生命のフィロソフィー」などのユニークな論文を書かれました。大学の存在意義、大学の批判能力が問われている中で、このような論文を書くこうとし、そして書くことのできた教員があつたことは、学部にとって、また大

学にとっての名誉であり、先生がかけがえのない存在であったことを思います。

先生、長い間ありがとうございました。

先生は一昨日をもって病との戦い、世のわずらいから解放されました。どうぞ安らかにお眠りください。

十月二十八日 奈良県の葬儀場

沢田先生文化勲章受章記念碑除幕式

沢田敏雄先生の文化勲章受章記念碑の除幕式にあたり、沢田先生には改めてご受賞のお祝いを申し上げます。また、先生の母校である三重高等農林学校の伝統を直接受け継ぐ学部である三重大学生物資源学部といたしまして、今回の記念碑建立のご発意から本日の除幕式にいたるまで、種々ご尽力賜りました各位にあつくお礼を申し上げます。

沢田先生のご業績などにつきましては、今更私が申し上げるまでもありませんので、個人的なことから申し上げますをお許しいただきしたいと思います。

先生は、三重高等農林から京都帝国大学へ進まれましたが、私は逆に、京都大学農学部から三重大学に参りました。私が京都大学に入学したのは既に三十数年も前のことです。私が入学して、知り合いの先輩からまっさきに聞かされたことの一つが、京大農学部には沢田先生という怖い先生がおられる、ということでした。その後私は大学院の博士課程まで進んで学位を得ましたが、私が学位記をいただいたのが、ほかならぬ当時の京大総長であった沢田先生でした。そのことを思いまして、本日、この場に立つておりますこと

を光栄と思いませんとともに、不思議なご縁とも感ずる次第です。

その後、私は縁あって三重大学に赴任したわけですが、文化勲章ご受賞をお祝いする講演会が三重大学で開かれた際に初めて個人的にお話をする機会を得、先生が単に怖い先生ではなく、すっぱりと竹を割ったようなご性格であることを知りました。そして熱意に満ちた講演を拝聴し、文字通り先生の警咳に接しまして、心意気を感じたと申しますか——、そのとき思いましたことは、インターネットの時代、イー・ラーニングの時代であっても、むしろそういう時代であればこそ、生（なま）の講義がますます重要になる、ということでした。

私は毎年、入学直後の一年生全員を対象とした入門的講義を行っていますが、講義では必ず、三重大学生物資源学部の大先輩としての沢田先生を紹介することにしております。その際には先生の情熱あふれる講演の記憶が私にエネルギーを与えてくれるように思っております。

沢田先生におかれましては、健康に留意され、後進の指導と共に、先生ご自身もますますご活躍になられることを祈念し、私の祝辞といたします。

伊賀市青山支所 十一月二十八日

練習船運営会議

本日は、冷たい風が吹く寒い中、三重大学へようこそおいいただきました。歓迎を申し上げます。

寒いとか風が強いとは言いませぬ、船乗りにとっては大したことではないかもしれませんが、練習船を

持つ大学に取りましては、大学や練習船を取り巻く環境は厳しいものがあり、嵐の中にあるように感じます。しかしながら、水産学や海洋研究はますます重要になっており、練習船を持つ大学は全国でも大変少なく、その意味で私共の社会的な責任は大変大きいと共に、練習船を持つ大学は大きなメリットを持っているという面もあります。

本日の会議では、共同運行や「拠点化」の問題を始め、今後のターニングポイントとなり得るような問題も話し合われます。この会合が実り豊かなものになることを祈念しております。

私は、夕方の懇親会でまたお目にかかります。ひとまず、簡単ながら、歓迎のご挨拶を申し上げます。

十二月（十八日）（生物資源学部大会議室）

三重大学先端研究シンポジウム

本日は「三重大学先端研究シンポジウム」に多数の皆様にご参加いただき、ありがとうございます。また高橋千秋議員におかれましてはご多用の所、特別講演をしていただき大変感謝しております。

今回のシンポジウムでは、特に生物資源学部の研究者による、バイオマス、およびその関連の研究やプロジェクトの事例をご紹介いたしました。

本日のシンポジウムのチラシを改めてご覧いただきますと、「クリスマス・シンポジウム」と銘打っております。クリスマスにバイオマスの話、というのは、韻を踏んだわけではありませんが、クリスマスの「マス」の方はキリストの生誕を祝う「ミサ」という意味のようで、人類の救い主の誕生を記念しています。今回の

テーマも、環境や食、エネルギーという、人類の生存に係わる深刻な問題、まさに「救い」を必要とするような問題ですが、本日のシンポジウムはこれらについての学術的なミサであったのではないかと、とも思いますが。

三重大学や三重大学生物資源学部は今後これらの問題と取り組んで参ります。皆様の一層のご支援をお願いし、簡単ながら閉会の挨拶と致します。

十二月二十二日 東京都市センターホテル

二〇一〇年

練習船「勢水丸」松阪基地改修視察会

本日は学長、理事はじめ皆様に練習船・松阪基地改修視察会にご出席いただき、ありがとうございます。

この基地は、練習船「勢水丸」の後方支援基地として、一九八一年に建設されたものです。建築後約三〇年近くを過ぎ、近年、色々な支障が生じておりました。

地盤沈下のために建物にゆがみが生じたこと、クレーンが古く大型・新型の観測機器などに対応できないこと、さらに、トイレも古く実習などに支障が出る、などの問題が出ておりました。

今般、学長の英断と、事務局長はじめ事務部のご尽力を得て改修が終わり、大変使い勝手の良い基地に生

まれ変わりました。

昨年、練習船「勢水丸」の竣工祝賀会が行われましたが、その際、私は、ある東大教授が、伊勢湾に面した三重大学の印象として、「真理の大海（おおうなばら）に乗り出す大学」と言われたというをご紹介します。その真理の大海に乗り出す基地が、若干心許ない状態であったわけですが、今般の改修で面目を一新することとなりました。

これを機に、本研究科として一層、教育・研究に邁進したいと思えます。

三月八日 松阪港「勢水丸」拠点

三重大学大学院生物資源学研究所セミナー④四日市

本日は、「三重大学大学院生物資源学研究所セミナー④四日市」にお集まりいただき、ありがとうございます。このセミナーは、私共の研究科の主催ではありませんが、単に私共の研究発表を行うというのではなく、「地域活性化への挑戦」を掲げたマッチング・セミナーでもあり、今回は特に、四日市市と四日市商工会議所のご後援をいただいて、「三重TLO」と共同で開催することとなりました。

三重大生物資源学研究所は、教員約120名を擁しております。これは農学系の学部としては全国でも有数の規模ですが、農林水産業や食品産業を中心として、「食の安全・安心」「環境」、「バイオテクノロジー」などに関する研究を行っています。

三重大学では、最先端の研究を行っている教員グループが、テーマごとに「リサーチセンター」という組織を形成してありますが、生物資源学研究科では、農林水産業や食品産業の研究推進を図るため、二つの「リサーチセンター」を立ち上げました。

このリサーチセンターは、リサーチを行うと同時に、三重大学と民間の皆様との交流を深める場でもありません。

そこで本日のセミナーでは、最初に、その二つのリサーチセンターをご紹介します。ご紹介するのはそれぞれのリサーチセンターのセンター長です。続いて、食の安全・安心、および食の確保に関する技術を4件紹介したいと思います。私も一つ、話題を提供いたします。

食の安全・安心は、農業と食品加工や食料・食品販売の食品産業とのコラボレーションで成り立っています。農業と食品産業とのコラボレーションを一層推進するには、農商工連携を積極的に推進する必要があります。そこで今回は、農商工連携に積極的な皆様にも参加をお願いします。

セミナー終了後は、名刺交換会と懇親会を計画しておりますが、そこで多くの方との知己を得て、交流を一層深めるきっかけとさせていただきますと思っています。

最後に、本セミナーに後援をいただきました四日市市と四日市商工会議所、また共催の三重TLOの関係者各位にお礼を申し上げ、開会の挨拶いたします。

三月十二日 じばさん三重4F視聴覚室（三重大学四日市フロント）

退職者送別パーティ

一言、ご挨拶を申し上げます。

今年、教員三名、事務長二名の五名の方が退職されます。先ほどご紹介がありましたようにこの五名の方はいずれも三重大学の勤務が二十年、三十年という方々ばかりであり、このような方々が退職されるのは、研究科としては人的財産の減少ということで大変残念です。しかし三名の先生方はいずれも新年度からも講義を担当していただきますし、また二人の事務長も大学レベルでの活動を今後も支援していただくことになっています。

これまでのご活躍に研究科として改めてお礼を申し上げますとともに、皆様方が健康に留意されて、ますます活躍されますように祈念をいたしまして、簡単ながら挨拶いたします。

三月（二十三日）

日本草地学会懇親会

日本草地学会の大会が開催されますことに、心からお祝いを申し上げます。会場大学として、歓迎を申し上げます。

〔中略〕

草地学会が、今後ますます発展され、日本と世界に貢献されることと、また、学会員の皆様の研究の発展とご健勝を祈念いたしまして、挨拶いたします。

三月二十六日（ホテルグリーンパーク津）

大学院説明会

今日の説明会には、生物資源学部の四年生の参加も多いと思いますが、他学部や他大学からお出でいただいている方もあると思いますので、そのような方々にまずは歓迎を申し上げたいと思います。

大学院がどのような組織になっていて、どのような研究ができるか、ということについてはこれから説明があると思いますので、細かい説明はそちらに譲ります。

大学院での研究は、いわゆる「研究室」に入っ行って、一日のかかりの時間をそこで過ごすことになります。進学に当たっては、研究テーマ、研究内容自体はもちろん重要ですが、他方、特に実験系の研究室では、研究室との「相性」ということが実際にはあります。レベルの高い研究を行っていると言われる研究室、人気の高い研究室が、自分にとって相性のよい研究室かということは実際に見てみないとわからないことがしばしばあります。今日は研究室を実際に見る機会があると思いますので、そういうことも念頭において進学を検討していただきたいと思います。

昨今は就職が厳しい状況があります。大学院へ進学してしっかりとしたスキルを身につけて就職するとうことは一つの選択肢であるうと思います。

来年四月に、大学院生としての皆さんにお目にかかれることを期待しまして、挨拶とします。

五月 生物資源学部1階教室

三翠同窓会誌「」挨拶」

三翠同窓会会員の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。皆様には日頃より、生物資源学部・生物資源学研究所の運営に対してひとかたならぬご支援を賜り、心よりお礼を申し上げます。

学部・研究科の近況のいくつかを順不同でご報告いたします。

「学部学生の進路動向、新「勢水丸」の竣工、農業別科の廃止、退職教員情報交換会についての記事、略」

・ 沢田敏男先生業績記念碑

最後に、更に一件、面白い話題をお知らせします。三翠同窓会会員でもある、元京都大学総長・沢田敏男先生が文化勲章を受章されたことはご存じと思いますが、先生の業績をたたえる石碑が、ご出身地である伊賀市（旧青山町）の市庁青山支所に建立され、その除幕式が昨年十一月二十八日に行われました。私は先生が卒業された三重高等農林学校の関係者として出席し、お祝いの言葉を申し上げました。挨拶に立たれた先生が、メモもなしで、多数の祝辞の一つ一つに対し、その順に個人名と肩書きに言及され、それぞれに短いコメントをつけて謝意を表されたことには驚きを禁じ得ませんでした。まっすぐな視線、伸びた背筋、引いた顎。先生の年齢の三分の二にも満たない私としては目が覚めるような思いがしました。石碑には先生の筆になる「農は国の大本にして水利は農の命脈なり」の文字が刻まれています。

以上、学部・研究科の近況をご報告申し上げます。挨拶といたします。

文書による挨拶

五月

「食と農を考える女性研究者のワーク・ライフバランス」エンカレッジセミナー

私も生物資源学部と縁の深い農研機構と共同開催で、このようなセミナーが開かれることを大変うれしく思います。

農学、あるいは、バイオサイエンスは、女性研究者が活躍することが多い分野で、生物資源学部でも学生の四割近くを女子学生が占めます。しかし大学院での割合は減少しますし、教員、研究者になるとその割合が急に減ります。

それは日本の社会が、（あるいは三重大が、というべきかもしれませんが）まだ成熟途上にあることの反映であろうと思っています。

【中略】

今回のようなセミナーを重ねることによって、女性研究者が社会へ進出するとともに、そのことによって、男性にとってもワーク・ライフバランスのとれた、男性も女性もともに社会を支える、全体として成熟した社会が実現することを期待したいと思います。

七月二十二日

オープンキャンパス

本日は、生物資源学部のオープンキャンパスへ、ようこそおいいただきました。心から歓迎いたします。生物資源学部は、古い歴史を持つ学部ですが、新しい時代へ向かって様々なチャレンジをしています。本

日のオープンキャンパスではその内容をじっくりと見ていただきたいと思ひます。

三重大学生物資源学部は、二つの「先祖」を持っています。一つは三重高等農林学校で、これは一九二一年の創設です。三重高等農林学校の卒業生には沢田敏男先生という方がおられますが、この先生は四年前に文化勲章を受章されました。

また三重県立大学水産学部が一九五〇年にできました。これら二つの学部が今から二十年以上前の一九八七年に一つになり、生物資源学部になりました。ちなみに、京都帝国大学農学部（現在の京大農学部）ができたのは、三重高等農林よりも二年後の一九二三年、また名古屋大学農学部ができたのは、更にその三十年後です。

〔中略〕

最後に、あらためて皆様に歓迎の気持ちを表し、私の挨拶といたします。

八月（九日）

近畿・東海地区農学系学部長会議懇親会

本日は長時間にわたって貴重な議論をしていただき、ありがとうございます。準備をしていただいた京大農学部・遠藤学部長と農学部事務室の皆様へ感謝を申し上げます。

私ごとですが、私は京大農学部の出身です。先ほど議論が行われました会議室は、長年、教授会が開かれた部屋であると思ひますが、あの部屋で私自身の入試判定が行われたり、学位審査が行われたりしたと思う

と感慨が深いものがあります。

もつとも、そのころの教授の先生方（私たちの先生方）から見れば、現在、大学は思いもかけないような状況になっており、思いもよらぬような議題を議論しているのではないかと思えます。

今、私たちが教えている学生たちがやがて学部長になる頃に、大学がどのようになっていくか想像がつかせませんが、できるだけ良い遺産を伝えて、バトンを渡していきたいと思っっている次第です。

それでは、今後の農学系学部のますますの発展を祈念して、乾杯をしたいと思います。

九月（十日） 京大正門横レストラン

三翠農学会三重県支部総会

三翠農学会三重県支部総会の開会をお祝い申し上げます。

また皆様におかれましては、日頃より、学部の運営に対してひとかたならぬご支援を賜り、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

国立大学が法人化され、昨年を以て第一期が終わり、今年度から第二期が始まりました。

すでに新聞報道などでご存じと思いますが、法人化後第一期の評価では、三重大学はまず問題のない評価を受けており、また三重大学においても生物資源学部は研究で優れた評価を受けました。

また、2年前から経済状況が悪化し、学生の就職にも大きな影響が出ていますが、今年三月の卒業生では、就職希望者のうちの九十五%が就職いたしました。これにつきましては、後ほど、三翠同窓会の席でご紹介

する機会があるかどうかと思います。

他方、これも報道でご存じと思いますが、来年度、国立大学の予算が大幅に減額される可能性があります。もし機械的に予算削減が実行された場合、総合大学では一つの学部が消滅するほどの規模であり、国立大学協会などが強い反対を表明しています。

就職についても依然、厳しい状況は続いており、今年度の就職希望者で、すでに多くの学生が内定をいただいています。楽観ができる状況ではありません。

生物資源学部としましては教職員が力を合わせ、この困難な状況を乗り越えて行きたいと思っておりますが、引き続き、皆様からのご支援もいただきますようお願い申し上げます。

終わりに、三翠農学会のますますのご発展を祈念いたしまして挨拶と致します。

九月二十五日 生物資源学部

熱測定学会懇親会

「第46回熱測定討論会」にご参加頂き、また、歴代会長はじめ皆様方にこの懇親会に出席して頂き、実行委員長として、また会場校を代表してお礼を申し上げます。

今回の討論会の状況についてご説明いたします。

今回の討論会の参加者は合計一八〇人。発表は、特別講演、シンポジウム、一般講演を含めて百二十三件、また機器展示が八件でした。

二年前、当時の稲葉会長から、討論会開催の打診をいただいたとき、津のような田舎では人が集まらない、と危惧の念をお伝えしました。会長からは、「そんなことはありません。津は立派なところですよ」と言下に太鼓判をいただいてお引き受けしましたが、夏に筑波で開かれた国際学会の影響もあって、発表件数が若干少なくなったのは心残りではあります。しかし、その旨を吉田会長に申し上げたところ、その分、活発な議論をしましょう！と励まして頂いた次第です。

もう一つ、機器展示会場を工夫するように吉田会長からアドバイスがあり、今回はポスター会場と機器展示を同じフロアで行うように意を用いました。そのため、昨年度のように機器展示場が閑散としているということはありませんでしたが、他方、本日のプログラムはポスター会場と口頭発表会場の二会場に分かれ、いささかのご不便をおかけしたことをお詫びしたいと思います。

他にも色々、不備な点があるかとは思いますが、皆様のご協力を得て、明日のお昼まで、活発な議論が行われることを期待しております。

九月(二十七日)

三翠農学会三重県支部機関誌「三翠便り」

三翠農学会三重県支部の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。皆様には日頃より、生物資源学部・生物資源学研究所の運営に対してひとかたならぬご支援を賜り、心よりお礼を申し上げます。

本年十月、生物多様性に関する国際会議、いわゆるCOP10が開かれ、三重大学生物資源学部の学生や教員も、名古屋会場の他、「COP10in三重」の催しでも貢献いたしました。このことはニュースでも取り上げられましたので、ご存知の方もおられると思います。

日本は、国際的にも国内的にも多くの困難な問題をかかえています。食糧問題もその一つですが、最近もTPPという略語が突然テレビや新聞紙上にあふれ、あつという間に広まるということがありました。TPPには様々な要素があり、単純な議論では答えを出すことができない問題ですが、ある政治家がTPPに関して、「農業などの第一次産業はGDPの1.5%」という論点からの発言をしたことが大変気になりました。

「1.5%」という数字は事実であるかも知れませんが、第一次産業の社会的価値をGDPという一つの物差しで測ることは無謀と思われれます。

大学が本来持つべき重要な使命の一つは、生物の多様性ならぬ価値の多様性を尊重し、価値そのものの検討をするということ、社会の価値観がともすれば単純化したり一人歩きしたりすることに對して注意を喚起することであると思います。価値の検討をするには社会から一定の距離を保つ必要もあります。

以前の大学は、社会とあまりにも「距離」を置きすぎたために「象牙の塔」とも揶揄されました。現在では大学の「社会貢献」ということが強く求められ、社会に直接関わることが求められますが、距離を置かなければ「評価」に振り回され、単純な価値の中に容赦なく取り込まれることにもなります。

大学が距離を置くべき社会と距離を置かざるべき社会。それらとの絶妙な接点にあるのが同窓会であり、その意味で同窓会の大切さを改めて思う次第です。

引き続き、皆様からのご支援を賜りますようお願い申し上げますと共に、三翠農学会のますますの発展を祈念いたします。

文書による挨拶

農芸化学会中部支部例会懇親会

私も農芸化学会のメンバーですが、ここでは会場大学を代表しまして、皆様に歓迎の意を表したいと存じます。

すでに何年も前になりますが、三重大学で農芸化学会の若手シンポジウムが行われた際に、私もシンポジウムのお世話をいたしました。その時の講師の顔ぶれを思い起こし、今回の講師の顔ぶれと比較して、一回り時が巡った、という感慨を深くしております。

「農芸化学」という名称は大変古い歴史を持っているわけですが、もう百年以上前に書かれた、新渡戸稲造の『農学本論』の中にもこの名称にやや批判的に言及してあります。私自身は、この「農芸化学」という名称は、実によく考えられた言葉だ、ということを最近、痛感しました。三重大学を初め、各地の大学で農芸化学という名称がなくなっているわけですが、それが果たしてよいのかどうかというのは、一度検証してみてもよいのではないかと、という気がしています。

それはさておきまして、若手研究者の皆様方の研究の発展と、農芸化学会がますますの発展をお祈りいたします。簡単ながら歓迎のご挨拶いたします。

十二月 (三重大学生協)

みえ水産フォーラム

本日は、三重県の漁業者の方々、県民の皆様をはじめ県内の行政や試験研究機関の皆様には、ご多忙のところ「みえ水産フォーラム」にご参加いただき、ありがとうございます。

今回のフォーラムは、「三重地域産学官連携水産研究連絡会議」の主催です。この会議は本年5月に発足いたしました。名称からご想像いただけるかと思いますが、これには、三重県の農水商工部・三重県水産研究所、独立行政法人である水産総合研究センター養殖研究所、そして三重大学生物資源学部に所属する、企画担当者、研究者、教員などが参加しており、連携・協力しながら三重県の水産業に寄与する研究課題・教育課題を掘り起こし、共同研究の実施、得られた成果の公表などを行っています。

本日は、その連絡会議の「成果の公表」活動の一環として、第一回目のフォーラムを開催いたしました。

この組織には、行政機関、研究機関、教育機関が参画しております。もとよりそれぞれの目的や使命は異なっておりますが、性質の違った海流が交わる「潮目」が豊かな漁場となるように、異なる使命を持った組織が「水産」という点で交わるこのフォーラムが豊かな実りを生み出すことを期待しております。また三重大学といたしましても、このような機会を捉えながら、地域への貢献を目指して行きたいと考えております。

本日のフォーラムが、皆様の活発なご議論により、充実したものとなるようお願い申し上げます。簡単ではございますが、ご挨拶といたします。

十二月十二日

二〇一一年

卒論発表会開会

四年前の春に、二階の大講義室で、「就学カウンセラー」として初めて現四年生諸君と顔を合わせてから、あつという間に時間がたつて、卒業研究の発表会の日を迎えることになり、いさかかの感慨があります。

本日はその締めくくりの大舞台ということになりますが、発表内容は今更どうしようもありません。はつきりとした声で、レーザーポインタの“ぐるぐる回し”をできるだけしないようにしながら、落ち着いて発表をしてください。

また二年生、三年生は、初歩的なことで構いませんから、できるだけ質問をするようにしてください。また先生方におかれましては、厳しい質問は構いませんが、相手が四年生であることを無視した無茶な質問はされないようお願いをします。

二月（八日）

特別連携シンポジウム「自然共生学の展望」

ご挨拶を申し上げるのに先立ちまして、今回の震災で被害に遭われた多くの方にお見舞いを申し上げます。また、当地の方々の安全と、一刻も早い復旧をお祈りいたします。――

生物資源学研究科は、四月一日に森林総合研究所関西支所と連携大学院の協定締結を予定しております。

今回のシンポジウムはこれを記念しての連携キックオフシンポジウムです。

生物資源学研究科はこれまでに、農学系と水産系の2つの研究組織と連携大学院を組んでおりますが、今回、森林総研との連携大学院を持つことにより、農・林・水の3本柱がいつそう強化され、心強く思っております。

自身の専門は林学ではありませんが、個人的には林学に愛着があります。と言いますのは——昔、高校生時代から大学生時代にかけて、中山博一という林学の専門家にお世話になったことがあります。東大で林学を学ばれ、半世紀ほど前に名古屋大学の農学部長をされた方ですが、今で言うリモートセンシングの草分けであり、また一高か東大の学生の頃、『デンマルク国の話』で有名な内村鑑三から直接教えを受けたと伺いました。

この先生からよく伺った話の一つに、林学・林業と教育は似ている、というのがありました。どちらも数十年単位で成長を考えねばならない、ということと、従ってどちらも、あまり急いで成果を求めてはいけな、ということです。

せつかく植えた苗木を頻繁に引っこ抜いて、根が付いたかどうか確かめる、どれだけ生長したか調べるといふようなことをやっているようでは——昨今で言えば、自己点検・自己評価、ということになるかもしれません。そんなことをしていると、根付くものも根付かない。木も人間も、焦らず、ゆっくりと生長を見守るのがよい、という話でした。今回のテーマとの関連では、人の成長のあり方もまた多様であるといふことを付け加えることができるかも知れません。その十八番の話をされるときの、林学に対する誇りに

満ちた中山先生の表情をいまだに覚えております。

連携大学院は、高度な研究機関と、私共教育機関の積極的な連携によって、優れた人材を育てようとするものですが、今回の連携につきましては特に林学と教育の話を想起し、ひとしおの感慨があります。

今日のシンポジウムは文字通りの「キックオフ」ですが、今日から実質的に始まるこの連携が、豊かな大木に生長することを祈念すると共に、それをゆつくりと見守っていただきたいということをお願いしまして挨拶いたします。

三月十五日 生物資源学部大講義室

生物資源学部教員OB会

本日は寒い中、生物資源学部にお運びいただき、ありがとうございます。今回は特に、同窓会の内山会長にもおいでいただき、大変ありがたく思っております。

退職された先生方との意見交換会、懇談会は、昨年の三月に初めて行いました。

昨年はいったいどれくらいの先生においでいただけるのか、見当が付きませんでした。思った以上に多くの先生にお集まりいただき、また次回も、というお話もあり、今回も開催したという次第です。

明後日には卒業式が行われますが、私の正直な希望を申し上げますと、できれば卒業式当日にこの懇談会を開きたいと思っています。と言いますのは、卒業式では壇上に、名誉教授の先生方かと思いますが、退職された先生が着席して並べられます。挨拶も何もされるわけではありませんが、並んでいただくだけで価値がある、

つまり、学生に三重大学の歴史を感じてもらおう(学生にはそのときはわからないとしても、いずれわかる)ということが最近だんだんとわかってきました。

そういう意味で、できれば、多数の先生方に卒業式に列席していただいたその足で、今度は生物資源学部の懇親会にきていただく、というのが理想だと思っておりますが、卒業式当日というのはなかなか時間的に窮屈でもあり、このような日取りを設定しています。

生物資源学部の近況をお知らせしますと、国立大学が法人化されて最初の六年、第一期中期目標・計画期間が終わり、今年度は第二期の1年度目になります。つい最近、第一期六年間の評価結果が確定し、三重大学はまずまずの評価を受けましたが、三重大学の中では、医学部の評価が最も高く、ついで生物資源学部が高い評価を受けました。学長の意見によりますと、生物資源学部は三重大の看板でもあって、高い評価は相応であるし、むしろもっとがんばってもよい、という辛口の評価ですが、いずれにしましても、法人化直後の最も困難な三年間の学部長をしていただいた天野先生はじめ、多くの方のご努力と支援によるものと感謝をしています。

本日はこれから前半に「意見交換会」、後半、五時頃から「懇親会」を予定しています。懇親会には内田学長も顔を出していただけるようです。

今からの「意見交換会」でお話しいただく内容は決まっておりますし、熱い議論をしようというわけではなく、近況や大学へのご意見等をお話しいただきたいと思っております。本日まで出席以外の先生方の近況も、了解をいただいた上でお手元の資料に掲載してあります。

第一部の終了を4時45分までと予定していますので、大変恐縮ですが、お一人四分間をめぐりにお願いします。

三月(二十三日)

研究科長退任挨拶

生物資源学研究科教職員各位

本日を以て研究科長の任期を終えることとなりました。三年少々の間、様々な形で支援していただきました教職員の皆様にお礼を申し上げます。

退任にあたっての研究科への希望等は三月教授会で申し述べ、その要点はいずれ議事録にも収録されるはずですのでここでは繰り返しません。新研究科長のもとで教職員が(適度に)結束し、前進されることを望んでおります。

新年度からは一旦、生物資源学研究科を離れますが、今後ともよろしくお願いいたします。簡単ながら、退任にあたり、ご挨拶とお礼を申し上げます。

三月三十一日 (メール)

理事着任挨拶

三重大大学の学生歌「瑞穂映ゆ」は、半世紀以上前に農学部的女子学生によって作られました。知性を磨くこと、自由を守ること、真理を求めることの決意が、若者らしい自負をもつてうたわれています。「真理はわれらを自由にする」という言葉をも連想させるこの決意は、現今求められている3ポリシー策定などの土台をなす、大学の存在理由でもあると思われます。新制三重大大学の創設期に学生自身によって掲げられた不易の理想に近づけるよう、2年間、努力をしたいと思ひます。

四月（大学ニュースレター）

「大学リレー熟議（三重大学）」閉会のことば

本日は、鈴木寛・文科副大臣はじめ、学校や企業関係の皆様、市民の皆様にもご参加いただき、長時間にわたり熱心に議論に参加していただき、ありがとうございました。

今回の「熟議」は、三重大学の講義の一環として計画されました。熟議の準備が進むにつれて当初の趣旨からは規模が大きくなり、また講義の受講者にも一年生や二年生が多いことから、正直のところ、運営を心配しておりました。

三重大学の学生はおっとりしている、としばしば言われますが、しかし今回ふたを開けてみますと想像以上にしっかりと運営されており、身内ではありませんが見直したというのが正直なところであり、熟議とその準備を契機として学生が大きく成長したのではないかと思ひます。見直した、ということは、実は私からは見えていなかった学生の別の姿をここで見ることでできたということでもあらうかと思ひます。

今回の熟議をきっかけとして、様々な地域の組織、企業、あるいは市民と、三重大学との関係ができたり、深くなったりしたことは大変ありがたく、また大学として重要なことであると考えています。

最近では三重大学でも、卒業式などのセレモニーで、学長、学部長などがガウンを着用するようになりました。「ガウン」は「大学」の象徴であり、ヨーロッパの古い大学町では、大学のことをガウン、地域のことをタウンといい、この二つを組にして「タウン・アンド・ガウン」というそうです。この言葉には、タウンとガウンの間には壁があるという背景があるようです。

東京が何かをやってくれるのを待つ時代ではない、というお話が先ほど副大臣からありました。その意味では、タウンとガウンが壁を作っているのではなく、今回の熟議などをきっかけに関係を密にして地域の発展に貢献していくこと、それが地域圏大学としての三重大学の重要な役割であり、副大臣の言われた「政府から学府へ」ということの中身の一つではないか、と思つた次第です。

関係各位に改めてお礼を申し上げ、閉会の言葉とします。

七月十六日 三重大学講堂小ホール

みえアカデミックセミナー

「みえアカデミックセミナー」へようこそおいただきました。

このアカデミックセミナーは、今から十三年前に、三重大学を含む県内の四つの大学による企画として始まりましたが、現在では15の高等教育機関による共同の企画となっています。

今朝は、「なでしこジャパン」のワールドカップ優勝のニュースで、文字通り目が覚めました。なでしこジャパンは若い人たちのチームですが、男子プロサッカーの三浦知良は四十四歳の現役で、最近でも『やめないよ』というタイトルの本を出しています。最近は、相撲の魁皇や、テニスの伊達公子、野球の工藤投手など、一昔では考えにくい年齢の人たちが現役のプロとして活躍する時代になりました。

肉体を酷使するスポーツでさえ、その年齢がどんどん上がっていきませんが、まして頭を使って学ぶ、ということは年齢とは無関係の一生の課題であり、「やめないよ」というより「やめられないよ」という時代となりました。

「みえアカデミックセミナー」のような機会が、その、やめることのできない生涯学習の一助となることを願いますと共に、教育機関にとっても市民の皆様から様々な刺激や示唆をいただく機会にしたいと思っています。

本日は、三重大学の当番で、吉井教授が担当いたします。

天気は荒れ気味ですが、この休日のひとときが、充実した時になりますように祈念して、開会のご挨拶といたします。

七月十八日 三重県総合文化センター

「3つのポリシーの策定」についての全学FD

今回、三重大学の全学FD「ファカルティ・ディベロプメント」として、「3つのポリシーの策定」につい

ての、講演と意見交換の場を設けました。

このFDの目的や趣旨はいくつかありますが、まずは現実的な問題として、3つのポリシーの策定が求められており、三重大学の中期目標での年度目標として、今年度はディプロマポリシーDP、来年度はカリキュラムポリシーCPの策定を挙げている、ということです。

しかしながら、実際には学部や学科によって進捗状況には大きな差があつて、すでにDPが策定済みの学部もありますし、あまり進んでいない学部もあります。また同じ学部でも、たとえばJABEEの認定を受けている学科とそうでない学科の間では、3ポリシーの理解度も策定作業の早さもずいぶん異なると思われる。

今回のFDでは、そのような全学的な不揃い・でこぼこを少しでも平坦にして、今年度末には、まずDPの策定が全学的に終わっているというゴールを目指したい、と考えています。

講師として、立命館大学の沖先生においでいただきました。原理的な問題から、策定作業の実際まで、各学部の状況に応じて参考になるお話があると思います。沖先生には、昨年、人文学部で同じような趣旨のFDで講師をしていただいています。今回はさらにバージョンアップしていただいた、と伺っています。

3つのポリシーの策定という作業は、少なくとも最初の段階としては、自己理解という意味合いも強いのではないかと思います。

3ポリシーは策定しなければなりません。明文化という作業を通じて、学部の特徴や強み、改善すべき点が発見されるとすれば、単に年次目標に挙がっているということだけでなく、本来の目標が達成されるこ

とになる、と考えております。

九月（十六日） 三重大学教育学部大会議室

隣接学校園との連携に基づく教育フォーラム」挨拶とコメント

始めに、今回の事業において多数の学生を引き受けていただきました、一身田校区・橋北校区の学校長、園長をはじめ、教職員の皆様、教育委員会の皆様に、心からお礼を申し上げます。――

教育実習の前後で人が変わったように学生がしっかりとするということは、しばしば経験することです。今回お世話になりました学校の先生方からは厳しいご指摘もいただきましたが、先程来のポスター発表や口頭発表では、受け身で授業を受けている時とは違った生き生きとした学生の姿が見られ、能動的な学びが学生を成長させるということを改めて思いました。今回の事業は、そのような学びが近隣学校と本学との連携の中で行われたという点で意義が大きいと思っています。

今回の事業は教育学部が主体となって進められました。私は学内の者ですが、高等教育創造開発センター長としてコメントをいたします。このセンターの名前はあまりなじみがないという方が多いと思います。お手元のパンフレットをご覧くださいますと、運営組織として教育学部に「地域連携推進委員会」があり、その下にこのセンターが位置付けられています。三重大学での教職課程は言うまでもなく教育学部がその中心となるわけですが、開放制の教員養成の原則に則り、教育学部以外でも教員免許を取得することができます。数は多くはありませんが、教育学部以外の学生でも入学した時点から教員を目指す学生もいます。主に教育

学部以外の教職課程について学内的な調整を行うのがこのセンターです。センターは実務レベルの役割を担っています。運営責任を担う全学的組織として「教職課程委員会」があります。この委員会は、教育学部長を含めた関係学部長、高等教育創造開発センター長等で構成されています。教職課程委員会が教授会に相当するとしますと、学部の教務委員会に相当する役割を担うのが高等教育創造開発センターです。教育学部、教職課程委員会、および高等教育創造開発センターという三者が一体となつて、三重大学での教職課程を運営していることとなります。今回の事業では、結果として教育学部以外の学生が近隣学校にお世話になるということがなく、センターの出番は表立ってはありませんでした。しかしこのような事業は、「地域に根差す」ことを目指す三重大学としては重要な活動であり、近隣地区との連携と同様に学内での連携も強めて、教職課程の強化に努めていきたいと考えております。

先ほどの、第二部冒頭での学長の講演スライドの中で、「大学における教養教育、リベラルアーツの重視」という文言がありました。これは、特に教育学部の学生の皆さんに申し上げたいことですが、教育学部の蔵書、特に古いものには「L」という記号がついているはず。なぜ「Education」の「E」ではなくて「L」なのかといいますと、(これには様々な歴史的な経緯がありますが)リベラルアーツ、教養を表す「L」です。教育実習では、教育上のスキルの重要性を痛感されると思いますが、そのスキルを生かす土台としての幅広い教養、あるいは深い教養が大変重要です。先ほど一身田中学校の校長先生から、「学生であることを大事にして勉強してもらいたい」というコメントがありました。これは本当にその通りであると思います。大学1年生ぐらいですと「習っていません」ということが通用しますが、これがだんだん通用しなくなり、特に

社会に出ますと、それを口にすることができなくなるといふことがあります。今は心おきなく勉強ができる時期ですので、その時間を大事にし、広い教養、深い教養を身につけていただきたいということをお伝えして、私のご挨拶とコメントといたします。

十二月七日 三重大学講堂大ホール

二〇一二年

三重大学公開FD 三重大学版初年次教育の展開と検証―全学生対象のPBL型教育―

本日は、遠いところからも多数の方々にご参加いただき、特に後半では長時間にわたって熱心な議論に加わっていただき、ありがとうございました。

本日のFDのキーワードの一つである「PBL」については、学長が冒頭のご挨拶で言及しましたので、私のもう一つのキーワードである「初年次教育」について述べます。

日本の大学における初年次教育については、比較的早い時期から取り組んでいた大学もありますが、全体としてはまだ歴史や実績が十分ではなく、三重大学における「4つの力 スタートアップセミナー」も、(予備校などの報告で取り上げられたりすることはありますが)完成形というわけでは全くなく、今日の公開FDでの議論やご指摘などを踏まえ、また各大学の取り組みも参考にして、この先、改善に取り組んでいかなければならないものと考えています。

初年次教育には様々なものが求められていますが、その機能の一つは、理想的に言えば、大学における教育の全体像を俯瞰的に示すということであると思います。しかしこれはそう簡単な作業ではなく、大学や教職員の力量が問われます。

同じように大学の初年次で開講されることの多いのが「教養教育」ですが、個別学問ではなく、その全容を俯瞰的に眺めようとする意図、あるいは意志、が「教養教育」にあるとすれば、初年次教育と教養教育には、互いに通じるものがあります。

日本の大学の“文化”の一つは、いわゆる「専門」教育の重視です。そのことの問題点は様々なところで指摘されていますが、いまだに根強いものがあります。専門教育を突き詰めた「研究室」での教育、いわゆるゼミや卒論に対して教員は熱心に取り組みますし、それこそが本務であるという意識もあります。その対極にある初年次教育に対する関心は、全体としてはいまだ低いというのが実情です。そのことと、教養教育の重要性が、特に近年、改めて強く言われながらも十分に組み込まれていないという事とも、やはり無関係ではないように思われます。

戦後の日本の教育改革を主導し、新制大学においては教養教育を主要な柱として取り入れることに功績があったのは、当時の東大総長であった南原繁ですが、ある総合大学の医学部の記念式典で南原が「教養」や「知の統一」について述べた次のような言葉があります。

「戦後のわが新大学制においても教養が重要な新しい問題として取り上げられておりますが、これは

ひとり学生だけの問題でなく、教える人―教授―自身の問題でもあります。

：学者はそれぞれの分野において専門の知識を究める者であると同時に、他方に、われわれの知性が、自然と文化の諸現象の根底に普遍的な高次のイデーを目ざし、専門的知識だけでなく、それを超えた、いわば人間の「叡智」を身につけてこそ、少なくともそれを心がけてこそ、初めて学生を指導し、人間を育成する「人類の教師」たることができるでありましょう。

近世科学の発達にともなって、大学が専門別的に次第に分化して各学部が生じ、その間に牆壁を高くして来たのに対して、「大学」が本来持っていた「知の統一」を回復することが必要となつて来ました。本学の医学部が最初は専門学校、ついで単科大学、そして終戦後に綜合大学の一環となった事は大きな意義があると思います。(南原繁『日本の理想』)

この内容は、「教養」という単語を「初年次教育」と言い換えても、さほど違和感がないように思いますし、また最後の一文は、本日も議論された「教育の主体は大学か学部か」「スタートアップセミナーを学部・学科ごとではなく全学統一で行うことの意義と課題」などの点とも関わります。大学が専門学部の単なる寄せ集めではなく、知の統一・知の全体に関わるということ、少なくとも本来は目指していること、そのことを大学に入った学生に意識させることが、初年次教育の目標の一つであるべきだと思いますし、それに見合う実態も必要です。三重大学の初年次教育は始まって間もなく不完全でもありますけれども、スタートアップセミナーを、(タイトルにもあるように)「全学生対象」で、学生が能動的に参加する「PBL型教育」という

形態で開講していること、の目指す理想もそこにありますし、南原が言ったように、学生と言うよりはむしろ、大学の教職員自身の課題であると考えています。

本日は遠くからご参加いただいた方もいらっしゃいます。三重県は観光の名所も多く、おいしい食べ物もありますので、三重での滞在もお楽しみいただければと思います。ご参加いただきましたことに改めてお礼を申し上げて、閉会の挨拶とします。

三重大学メディアホール 二月二十三日

高大連携推進懇談会

本日は年度末のお忙しいところ、第二回高大連携推進懇談会にお集まりいただき、ありがとうございます。ありがとうございました。

高等学校と三重大学との連携事業は、すでにかかなりの歴史があり、東紀州講座やSSHなどをはじめとして、かなりの実績を上げてきました。

しかし、「高大連携」は、このような事業の開催だけにとどまらず、特に大学がユニバーサル化した時代では、高大の接続という意味でも連携が重要になります。

他方で、大学は、かつてのような教育と研究だけでなく、様々な機能を要求されるようになりました。大学教員の業務が多様になって、一言で言いますと多忙を極めるようになりました。

その中でどのようにして高校との連携を深めていくかは、大学にとっても大きな課題ですが、必ずしも決

定的な解決策があるわけではなく、できるだけ効率的に組織的に行っていく必要があるものと思います。

本日は、この会議や夕方の懇親会で意見交換の場が設けられていますので、そのようなところでぜひ忌憚のない意見交換ができればと思っています。

懇親会の会場は病院のレストランですが、これが病院のレストランかと思うほどしやれて景色のよいところです。ご都合で懇親会に参加されない方も、ぜひ会場だけでもご覧頂くとよいのではないかと思います。

三月五日 三重大学

「教育実習の手引き」序言 「初心忘るべからず ―教育実習に臨む皆さんへ」

教師という職業は、人がその生涯を投じて悔いることのない職業の一つですが、特有の危険性もあります。すなわち、教えるという「立場」と、自分の人格との区別が曖昧となり、ひそかに傲りが心に入り込むという危険性です。

教育実習では、自らが教師として未熟であること、つまり「初心」者であることを初めて具体的に・痛切に学ぶこととなります。その初心者としての、時として苦しい自覚は、教師生活において忘れてはならない原点です。

この「手引き」が、教師生活の原点である教育実習を充実させる一助となることを望みます。

4月

みえアカデミックセミナー

梅雨明けを思わせる大変暑い日ですが、本日はたくさんの方に「みえアカデミックセミナー」においでいただき、ありがとうございます。このセミナーは、三重県生涯学習センターと三重県内の高等教育機関が合同で開催しているもので、本日は三重大学の担当です。

最近、これまでにない豪雨があちこちで観測されて被害が出たというニュースがよく聞かれますが、今回、三重大学は、「気象」の専門家である生物資源学部の立花教授を講師として選びました。立花教授の研究は最近の中日新聞の一面トップでも扱われていましたので、ご覧になった方もおられると思います。

気象学という分野は、昔から人々の関心を引いてきた古い学問ですが、その一方で最先端の学問でもあります。古いと同時に最先端であるということは、気象という現象が身近でありながら研究対象としては大変むずかしい分野である、ということが背景にあります。

天気予報というと、特に以前は、「当たらない」ものということになっていました。なぜ当たらないのか。学者は何でも研究対象にしてしまうという本能のようなものがありますが、半世紀前に、「なぜ天気予報は当たらないのか」ということを研究した気象学者がいました。そして天気予報が当たらない理由——というと語弊がありますが、正確な天気予報、特に長期予報が本質的に困難である理由を明らかにしてしまいました。天気予報が困難である原因を追及した研究やその関連の研究（カオス理論）はその後、数学や物理学、あるいは哲学の重要な分野となって発展していきました。

気象予測が難しい理由の一つは、取るに足らないようなちよつとした変化が大変大きな影響を与えてしま

う、ということにあるようです。これは「バタフライ効果」——北京の一匹の蝶々が気まぐれにひらひらした影響で、ニューヨークで嵐が起こってしまうかも知れない——という言葉で象徴的に表されています。本日は、夫婦でご参加いただいている方もいらつしやると思いますが、お二人のなれそめは、学校で席が隣だったというような、その時は気づきようもない小さな偶然だったのではないでしょうか。電車に一本乗り遅れていたら、人生が激変するかも知れませんが、そのことがまた他に影響していきます。そして世の中がそういう偶然に満ちているとすれば、将来を予測することは大変困難になります。気象予報の困難さはこれと似て、小さい変化が重大な変化をもたらす可能性がある、というところにあるようです。

しかし困難であることが明らかになると、その困難に挑戦したくなるのが研究者です。本日のセミナーは、その困難に挑戦している研究者の「異常気象は予測できるか」という、身近で難しい問題に取り組んだ講義です。しばらくの時間ですが、ご聴講いただければ嬉しく思います。

七月十六日 三重県総合文化センター

メンタルヘルス集中セミナー

メンタルヘルス集中セミナーを今年も開催することができました。

「健康」ということには、単に病気でないというだけでなく、また肉体だけでなく精神的、つまりメンタルヘルスということが含まれる、というWHOの古典的な定義がありますが、本学ではこのメンタルヘルスの問題にも組織的に取り組んでいかなければならないと考え、このようなセミナーを毎年開講しています。

今回は、大阪大学保健センター教授の杉田義郎先生にお越しいただき、「心の健康と睡眠について」というご講演をお願いしました。杉田先生については後ほど詳しい紹介があると思いますが、この分野の第一人者で、専門論文だけでなく一般向けのご著書もあります。

眠りに係わってフロイトが「無意識」を発見したことは、相対論などと並んで二十世紀重大な発見の一つに数えられると言われますが、眠りということが、人間の心、あるいは精神の深いところと係わっているということは素人なりに直感はできます。今日は専門のお立場から、心の健康と眠りにについてお話しが伺えるものと思います。

大変重要な事柄にかかわるご講演ですので、皆さん、眠らずにお聞きください。

十月二十九日 三重大学メディアホール

二〇一三年

理事再任挨拶

総括・教育担当として、引き続き2年間、理事の職に就くこととなりました。

大学の役割についてあらためて確認してみますと、「教育基本法」に始まり、学会会議や中教審の近年の諸答申、さらには本学の学則や中期目標まで、一貫して繰り返し、「教養」と「専門的能力」の二つの養成が謳われています。この目標に一步でもよりよく近づけるよう、微力を尽くしたいと考えています。

三重大学ニュースレター 四月

みえアカデミックセミナー

本日は大変暑い中、多くの皆様に、「みえアカデミックセミナー」においていただき、ありがとうございます。このセミナーは、三重県生涯学習センターと三重県内の高等教育機関が合同で開催しているもので、近年は、「海の日」が三重大学の担当になっております。

今年も大変暑い夏になっておりますが、昨年とは、異常気象に関する講演を担当いたしました。

本日は、三重大学生物資源学部の幹渉教授に依頼し、「海洋生物の贈り物がヒトの『美と健康』をつくる」というタイトルで皆様にお話しすることといたしました。

ご承知かとは思いますが、三重大学生物資源学部は、三重大学農学部と、三重県立大学水産学部という、二つの母体を持っていますが、幹教授は水産系の講座の所属です。

幹教授は、大学一筋の研究者ではなく、大企業での研究や開発の経験もあり、また自らビジネスを立ち上げていてという異色の学者でもあり、今日のお話もその実践的な研究と経験に基づいた内容になるかと思えます。ご期待いただきたいと思います。

三重県総合文化センター 七月十五日

地理教育夏季研修会

地理教育夏季研修会の開催にあたり、皆様に会場校として歓迎を申し上げます。

本来、この挨拶は朴理事が行う予定でしたが、急用のため、私が代わってご挨拶申し上げます次第です。

私は化学が専門で、私にとって「地理」と言えば、四十年ほど前の学生時代に、内村鑑三の「地人論」を読んだだけです。「地人論」を読んで、地理学というのは、博覧強記と言いますか、具体的な膨大な事実と、それを見渡すことのできる視点を必要とする大変な学問である、という印象を持った記憶があります。

そうした次第で、あまり気の利いたことを申し上げることもできませんので、会場校である三重大学について簡単に紹介申し上げ、ご挨拶に代えたいと存じます。〔中略〕

それでは改めまして「地図・地図帳を活用した社会科地理教育の実践」地理教育夏季研修会のご盛会を祈り、ご挨拶といたします。

八月二十三日 三重大学環境・情報科学館

合唱団定期演奏会

三重大学合唱団第53回定期演奏会の開催をお祝いすると共に、来場いただいた皆様に心よりお礼を申し上げます。

三重大学では、伝統的な体系的教育を柱としつつ、特徴的な教育方法として「PBL」(Project/Problem Based Learning)を積極的に取り入れていきます(PBL:プロジェクト推進課題解決型学習)。PBLでは、グループが一つの目標に向けて、各個人が固有の働きを積極的に担うと共に、その働きが全体の中で調和し、個人の働きの総和を超える実りがもたらされることを身をもって学びます。その意味で、合唱は典型的で理

想的なPBLとしての性質を持っています。演奏会が終わった後の合唱団員諸氏の、喜びと誇らしさに輝く顔は、そのことのない傍証であると思います。

この喜びが来場された方の心に届き、さらに大きな喜びの輪が広がることを祈念して、ご挨拶とします。

(パンフレット) 十月

二〇一四年

三重県教員免許更新講習連絡協議会

本日、三重大学が当番校となり、第二回目の三重県教員免許更新講習連絡協議会が開かれました。今回は特別に文科省から栗野道夫・室長補佐においでいただき、講習制度の改善について学び、考える機会としております。

私は最近、大学の教養教育との関連で、戦後の教育改革について勉強する機会がございました。

戦後間もなく作られた「教育刷新委員会」、当時の東大総長であった南原繁がその委員長となって強力なリーダーシップを発揮していますが、この刷新委員会を中心として、どのような理念・方針に基づいて、いかに精力的に真剣な議論が重ねられたのか、どのような議論がどのようなように行われたのか、という、膨大な資料の一端を知る機会がありました。

その刷新会議の議論においては、「六三三四」制、大学における教養教育、教員養成などの問題が、それぞ

れ個別にではなく、一体のもの、少なくとも有機的な関連のあるものとして議論されていることが改めて印象的でした。

委員長である南原は、基本理念・基本方針は変えてはならないが、制度自体は時々に変えられて良い、ということも言っておりましたが、本日の会議もそのような努力の一つであると私は考えております。本日の会議の全体がその意味で実りの多いものである事を祈念してご挨拶いたします。

三重大学大会議室 十月二十日

二〇一五年

理事退任挨拶

4年間、教育担当理事を務め、この間、様々な課題に直面しました。県内の大学生の半数以上をかかえる三重大大学のような地方大学には、特有の課題と社会からの期待があることを痛感します。この4月に新しい教養教育が発せりましたが、その成否（専門教育ではなく全人教育）が、三重大大学が社会からの負託に応えるかどうかの指標になるものと考えています。

業務を支えていただいた多くの方に感謝いたします。

三重大大学ニュースレター 四月